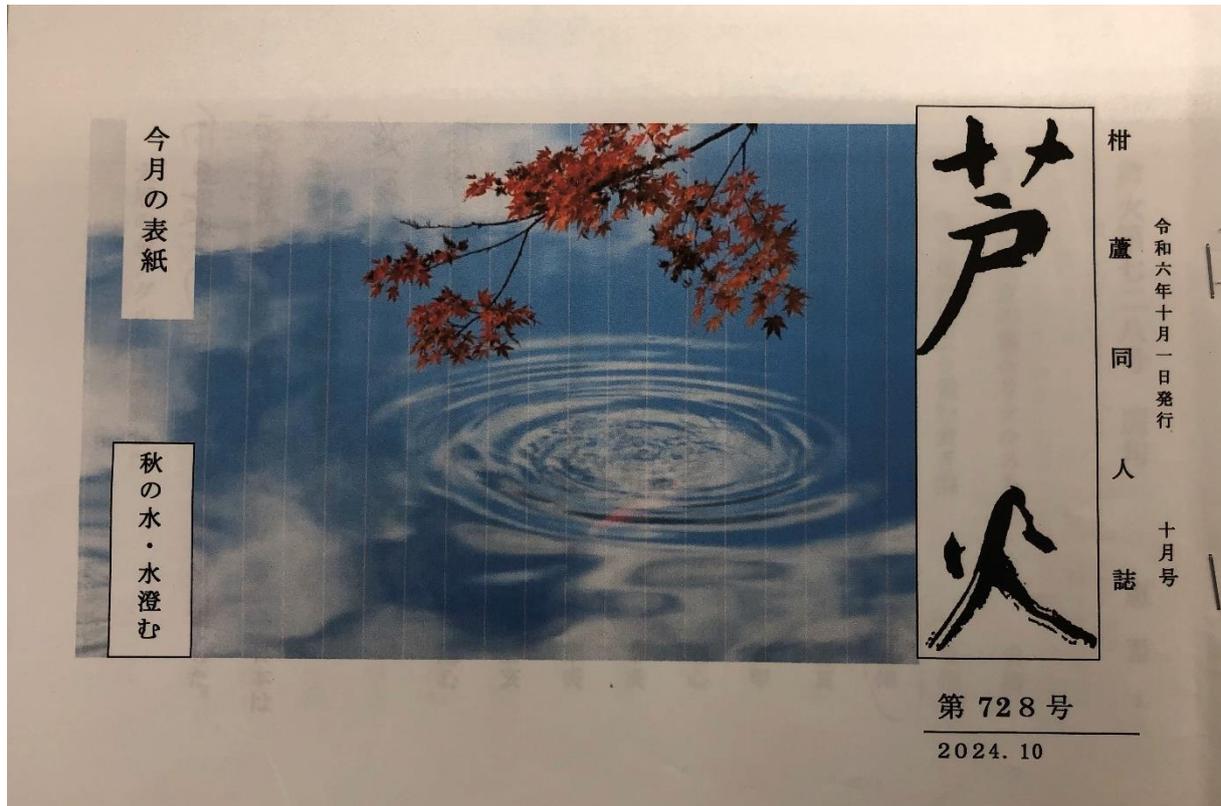


俳句の会「芦火」

☆柑蘆同人誌「芦火」第728号（令和六年十月号）表紙

- ・秋の季語：「秋の水・水澄む（三秋・地理）」
- ・来月号（十一月号）の兼題



<秋の水> （関連季語：水澄む）

秋になって澄み渡る水である。大気同様、秋は水も清らかになる。名刀のたとえに「三尺の秋水」という言葉があるが、「三尺」は剣の長さであり、その剣が澄み渡っていることの形容である。

有名俳人の句を紹介します。

秋の水淡路島根をかこひけり	向井去来
二またに細るあはれや秋の水	与謝蕪村
秋の水心の上を流るなり	加藤暁台
秋の水泥しづまつて魚もなし	正岡子規
病む父のほとりに母や水の秋	長谷川權
みずすまし遊ばせ秋の水へこむ	西東三鬼
さざ波をたたみて水の澄みにけり	久保田万太郎

☆高得点者および高得点句

＊前月の清記表に記載された13名の91句のなかから互選の結果、以下の同人が高得点者となりました。併せて高得点句も掲載します。

<高得点者（敬称略）>

16点 碧亥

14点 草炎、13点 恵吾、温州、12点 史浩

<高得点句（5点以上）>

- ・何の夢昼寝の吾子の笑い声／史浩・・・・・・・・6点
- ・寿命とは神のみぞ知る生身魂／恵吾・・・・・・・・6点
- ・炎天の影を拾ひて医者通い／草炎・・・・・・・・5点
- ・少年の脛の傷痕晩夏光／碧亥・・・・・・・・5点

<4点句（惜しい！もう少しで5点）>

- ・病窓に夏の雲ありクルスあり／史浩
- ・電柱の影のなほ濃き残暑なか／温州
- ・後戻り出来ぬ人生走馬灯／恵吾
- ・延長戦西日の中の外野席／温州

☆その他のトピックス

①「散歩道の自然～写真解説」：安本緑汀さん

今月はサルスベリの解説です。



○写真中上：シマサルスベリ（島百日紅）

屋久島から台湾にかけて分布する落葉高木。木肌は褐色で白身を帯びた縞模様が美しい。小さい白花を沢山つける。庭園樹として利用される。

○写真中上を除くすべて：サルスベリ（百日紅）

梅雨明けごろから九月末まで咲き続ける木の花。「百日紅（ひゃくじつこう）」の名は、百日ものあいだ咲きつづけることに由来する。花の色は紅のほか白、紫もある。樹幹の肌が滑らかで、「猿も滑る」ところからこの名がある。

百日紅（サルスベリ）は、ミソハギ科サルスベリ属の落葉小高木。中国南部が原産で、日本には江戸期以前に渡来した。高さは大きなもので十メートルくらいになる。幹はなめらかで薄茶色、葉は楕円形で長さ五センチくらい。七月から九月にかけて、枝先の円錐花序に皺の多い六弁の小花を次々に咲かせる。

また、同じところで剪定すると瘤が出来るが、この瘤は抗菌物質を作るので剪定瘤といわれ大切に取り扱いされる。

○百日紅（サルスベリ）を詠った句

- ・散れば咲き散れば咲きして百日紅 加賀千代女
- ・百日紅ややりがての小町寺 与謝蕪村
- ・百日紅ごくごく水を呑むばかり 石田波郷
- ・さるすべり美しかりし与謝郡 森澄雄
- ・いつの世も祈りは切や百日紅 中村汀女

②京滋支部総会&懇親会に参加して：平林温州

- ・京滋支部総会&が9月7日に開催され30名の方々が参加されました。
(和大より本山学長、足立副学長、金川経済学部長、柑芦会より垣見会長、和歌山、大阪、神戸の各支部長、現役学生3名、京滋支部会員20名)
- ・総会は中京区東洞院通りの公共施設で開催されましたが、懇親会は下京区四条大橋西詰の北京料理店・東華菜館での開催となりました。
- ・東華菜館は今から百年前に、メンソレータムで有名な近江兄弟社を設立した米国人ウィリアムズ・ヴォーリズが設計し建てられたもので、当時のまま今に至っているとのことです。館内には今でも稼働している日本最古のエレベーターがあります。
- ・この北京料理店の屋外に鴨川にせりだした納涼床料理の場所があり、そこでの懇親会となりました。
懇親会場からは、鴨川の対岸に南座を見ることができます。また、視線を落とせば、鴨川の土手に等間隔に座った多くの二人連れを見ることができます。
- ・残暑厳しい時でしたが、懇親会場は太陽も西に傾きかけ、鴨川から吹いてくる風が頬に心地よく感じられる程で、各テーブルでは和気藹々の懇談が進みました。
- ・懇親会の最終盤には、屋外ということもあって全員声を張り上げての「寮歌 花の霞に」を斉唱してお開きとなりました。

京滋支部総会&懇親会スナップ写真



③次の方々が近況報告をされています。

- ・後藤碧玄様
- ・北草次様
- ・安本緑汀様
- ・河本要様
- ・野崎六甲様

④仲秋と鳴く虫の展示会：穂永穂心様

- ・九月十四日に伊丹の旧岡田酒造の酒蔵（展示場）に行かれたそうです。会場では中秋のお茶の接待と虫の音の展示会をされていて、蟋蟀（こおろぎ）や蝻斯（きりぎりす）の仲間の虫を、虫籠や瓶に入れて薄暗い土間で鳴かせていたそうです。
- ・縁側には、中秋の名月用にススキや団子を供えて、昭和の景色を再現していたそうです。
- ・穂心様が現地で詠まれた4句
 - ・仲秋の月の出を待つ縁静か
 - ・薄暗き土間の虫籠ちちろ鳴く
 - ・杉玉の青々として新酒の香
 - ・酒蔵の茶席に列や十日月

<俳句の会「芦火」概要>

- ・会員は柑芦会会員
- ・現在の会員は大学3期卒から25期卒の13名
- ・昭和38年（1963年）結成・・・約60年の歴史
- ・会員の作句は通信俳句誌「柑蘆同人誌・芦火」に掲載され毎月各人に配付
- ・創刊以降毎月発刊。令和4年（2022年）6月に第700号発刊。
- ・50号ごとに句誌を発刊。令和4年5月に「芦火第14号句集」発刊
- ・創刊時からの延べ会員数、72名（高商32名、高商教授1名、大学39名）

<編集者・コンタクト先および会費>

- ・編集者：穂永 千秋（大学17期）（俳号：穂心）
メルアド：suishin2010@dream.ocn.ne.jp／携帯：090-9887-2513
- ・その他のコンタクト先：
 - ・山下 勝（大学14期・前編集者）（俳号：勝）
メルアド：yama723@nifty.com／携帯：090-1349-6727
 - ・平林 義康（大学20期）（俳号：温州）
メルアド：hirabayashi9497@yahoo.co.jp／携帯：090-8525-7293
- ・会費：年会費1万2千円

以上
(文責：平林 温州)